性転換した学者の説く、多様な性のあり方

原文: *Sexual diversity and the gender agenda*

Nature Vol. 429 (19-21)/6 May 2004; www.naturejpn.com/digest

Evolution's Rainbow: Diversity, Gender and Sexuality in Nature and People

Joan Roughgarden

University of California Press: 2004. 472 pp.

\$27.50, _18.95

Sarah Blaffer Hrdy

本書は一つのテーマを理路整然と追求するのではなく、互いに絡み合った三つのテーマの間を行き来する語り口になっている。第一のテーマとして、自然界に存在する性の多様性をもっと理解してほしいと、著者は心の底から熱烈に訴える。ゲイ、レズビアン、バイセクシュアル、トランスジェンダーなど「男性か女性か」という二者択一の分類にうまく当てはまらない多くの人々にもっと寛容になってほしいと、心から願っているのだ。

著者のJoan Roughgardenはスタンフォード大学の著名な生物学者で、かつては「John」という名の男性だったが、今は女性として生きるトランスジェンダー。本書では、心に苦痛を感じてからジェンダーを変えて生きる決心をするまでのケーススタディがいくつも紹介されており、読者の心に強く訴えかけている。あるトランスジェンダーの女性は、こう語っている。「これまでの人生で築き上げてきた仕事、親交、家族、健康、そして将来をすべてさらけ出しました。どれをこの先も持ち続けられるかは、運命が決めるのだと思いました。人生を最初からやり直すようなものです」

また本書には、自分がジェンダーを変えたことを上司に報告して、なおかつクビになら

ないための実用的なアドバイスという、なかなか得難い情報も記されている。ネイチャーの読者であれば、著者の解釈や政策提言の全てに同意できないとしても、本質的に人権問題といえるジェンダーをめぐる諸課題の主旨に異議のある向きはほとんどいないだろう。

第二のテーマは、人間社会全体と自然界にみられる性とジェンダーの多様性について書かれ、私にとっては非常に興味深い。本書にはこの点に関する情報が豊富に集められ、本の中にもう1冊の独立した本が存在している感じだ。

まずは、古代ギリシャの同性愛者、ローマ帝国の宦官、インドのヒジュラ、そしてアメリカ先住民の「二つの精神」(訳注: two-spirits = アメリカ先住民に由来する言葉で、自分には二つの性があると主張する人々のこと)に関する小エッセイである。続いて著者は、人間のジェンダー研究に相当する動物学上の研究について駆け足で解説を加えている。ここでは、雌から雄に変わる魚、乳腺を備えた腹袋とペニスを持つ半陰陽のカンガルー、個体群の最大16%が輸精管と輸卵管を両方備えているカンガルーネズミ、ペニスから仔を出産する半陰陽のクマ、雌雄同体のクジラ、ヘテロセクシュアルよりも子育ての上手なホモセクシュアルのcockatoosが紹介されている。

このようにジェンダーがあいまいになっている生物の事例は、性差に関する文献に詳しく読者にとっては旧聞に属するものもある

ば、まったく初耳のものもあると思われる。本書に、まばゆいほど斬新な部分は少ない。例えば著者が、自分が胚だった頃の発生過程を想像して語っている部分くらいだ。著者はできるだけ機会をとらえて、ジェンダーに幅があるのが自然であることを強調する。トランスジェンダーの人々は1,000人に1人の割合で存在すると、著者は推測している。そして著者は、従来の考え方に反して、トランスセクシュアルが異常ではない可能性が高いと主張し、本書全体を通じて、適応によってジェンダーがあいまいになったと思われる事例(例えば雌のように見える雄の魚)を示そうと苦心している。

本書は、自然界における性とジェンダーの多様性に関する情報を集めた書物としては、内容が最も豊富で、信頼性も最も高い。このような書物を切実に求めている研究者や一般読者に応える著作といえる。トランスジェンダーの生き物に関する情報を切望する読者や、私のようにゲイ・プライド・パレードやそれが象徴する社会の変化に大きな感動を感じる読者は、本書によってきわめて大きなインパクトを受けるだろう。それだからこそ、第三のテーマは、もっと注意深く考察してほしいかった。

著者自身も、この第三のテーマを読者に最も伝えたい部分と考えている。ここで著者は、「多様性を抑圧、否定してきた学界を告発する」根拠を提示するとともに、ダーウィンの性選択理論を否定する理由を示している。「自然

の事実」がダーウィン理論の誤りを証明している、と著者は主張する。著者は、性行動が基本的には協同作業であり、戦いではなく、受胎に至らないことも多い点を強調している。「私たちは、これまで自然に身につけてきたジェンダーとセクシュアリティの概念に、大きな欠陥があることに気づき始めた」と著者は記している。ダーウィンの性選択理論には大きな欠陥があるため、著者自身の理論を採用すべきだという主張だ。しかし著者の批判や理論よりも、そのタイミングのほうが私にとっては印象深かった。この進化生物学者の著者は女性として生きるようになったわけだが、そうやって初めてこれらの問題点に気づいたというのだろうか。

配偶子のサイズ(大きな卵子と小さな精子)に基づく二者択一のジェンダー体系から出発して、体サイズ、行動や配偶戦略の雌雄差を説明するのは適切ではない、と著者は主張する。雄を情熱的な性、雌を内気な性というステレオタイプに当てはめたり、雌による選択における社会的あるいは生態学的な制約を無視することは望ましくない。社会的または発生的状況を軽視して遺伝子を過度に強調したり、受胎しないという選択を犠牲にして「最良」とされる遺伝子の探求に重点を置くこともいかなるものか、と。私も著者には大賛成なのだが、いずれの点についてももかなり古いテーマという感じがする。

これらの問題に「気づき始めた」どころか、すでに1970～1980年代には女性の社会生物学者による議論が行われていた。進化論を拡大して、より多くのレベルでの選択圧を考察し、選択圧の考察対象を(例えば雌や若年個体に)広げることが提唱されていたのだ。本書の中では、このような議論については一部記述されているが、その知見によって既に現われている影響については検討されていない。

進化論の修正を求める動きは進化論の周辺部で始まってはいるが、(紆余曲折を経た)実際の変化は進化論者の間から生まれている。こうした過程は、科学がどう発展するのかを示す代表例といえる。長期的にみて研究者(特に若手の研究者)にとっては、性の多様性に関する情報を隠すよりも、積極的に研究して名声を築いたほうが得るものが大きいのだ。

このような時代になるまでには、たしかに長い道のりだった。だが、これまで学界の主流

から遠ざけられていた研究者たち(Katherine Ralls, Mary Jane West-Eberhard, Patricia Adair Gowaty, Barbara Smuts, そして私を含めた数多くの研究者たち)が十分な影響力を持つようになり、その考え方に他の研究者が耳を傾け始めると、進化論のスケールは大きくなりはじめた。新しい世代の社会生物学の研究者たちは、私たちをさっさと追い越して、広がりつつあるフロンティアの開拓に突き進んだ。理論が誤っているというよりは理論が不完全な部分や拡大適用されていた部分については、既に修正が始まっている。同様に、本書も性の多様性という広大な連続体におけるトランスセクシュアルという分野の研究を活性化させることだろう。

ただ私は、本書が次の二つの点で読者を誤った方向に導くのではないかと懸念している。第一に、「一方の性を持つ個体どうしが生殖目的での他方の性との結びつきを目指して競争する」という説明は、それですべてを説明できないにせよ、今でもしっかりと説明の枠組みとして機能している。第二に、研究者の仕事の進め方は今でもかなり誤解されているが、著者の「告発」が火に油を注ぐのではないかと、私は懸念している。

たしかに多くの医療関係者は、トランスジェンダーであることの意味をなかなか理解できなかった。また独断的な外科的治療や精神的治療によって命を落とした人々もいた。一部の絶望的なほど無分別な研究者は、いい加減な科学の普及者たちにそそのかされ、その支援を受けて、今でも「一流の科学文献にジェンダーのステレオタイプを忍び込ませて、

その客観性を損なっている」。ダーウィン主義者たちが問題意識を共有するまでの時間も、期待したよりも長くかかった。そして進化生物学の研究者も、社会による偏見の原因やそのような偏見が是正されたプロセスを、必ずしも常にオープンに認めてきたわけではなかった。進化生物学の世界にも意固地で独断的な人々がいるのだ。

だが本書がスポットライトを当てた偏見は、誤った学説や現実を隠蔽するための学説よりも、むしろ人間くささから来る職業的な原因によるものだ。私たちには、物事を自分たちの期待(時には欲望)にそった姿としてとらえる傾向があり、偏見に満ちた見方を議論の前提に組み込んでしまう。

生物科学や社会科学では、一般に認められている以上にエンパシー(誰の利害と共感するのかということ)が大きな役割を演じている。偏見を学習することが人間の心理に組み込まれ、自分自身(自分のジェンダーを含む)の利益に反する事象に気づかないようになっていくのかもしれない。だからと言って、そうした偏見は性選択理論を否定する理由にはならず、性選択理論を持つ研究者の間で多様性を促すための理由にしかならない。それは性やその他の自然の全体像を研究するために、よりよいことなのだ。本書が、この目標に向けたさらなる一歩前進となればよいのだが。■

評者の Sarah Blaffer Hrdy は、カリフォルニア大学デービス校人類学科 (the Department of Anthropology, University of California, Davis, California 95616, USA) の名誉教授。最新の著書に、Mother Nature: A History of Mothers, Infants, and Natural Selection がある。

essay concepts

見せ物の解剖死体はいらない

もはや解剖死体を見せるだけでは、学生や一般人に対して、現代解剖学の意義を十分に説明することはできない。

原文: *The public cadaver*

Nature Vol.428(805)/22 April 2004; www.naturejpn.com/digest

Horst-Werner Korf and Helmut Wicht

解剖学の知識が現代医学を支えている。それは人間の構造的および生物学的

な性質を理解するのににも欠かせない。

解剖によって身体が分析され、その構造や機能や機能不全についての洞察が得られる。▶